

スポーツの力
File No.
005

人と人との繋がりによって成長させてい
ただいているという実感がある。結局の
ところ、スポーツは人間本来の成長に繋がって
いると痛感しています。



プロフットバッグプレイヤー
石田 太志

フットバッグはどういう経緯で生まれたスポーツなんです
か？

スポーツとして始まったわけではないんです。もともとはアメ
リカのマイク・マーシャルというお医者さんが、膝を手術した患
者さんのリハビリ用として靴下に豆を詰めて「足を使って遊ん
でみてどうか」と言ったのが起源なんです。その後、みんな
が「これゲームとしても面白くないか」と思って公園に出
て、複数人で蹴鞠みたいに蹴っていたんです。その後、だん
だん技などが生み出されて、今に至るとい感じですね。

フットバッグの最初は、「蹴って楽しんだらどうか」といつと
ころからリハビリで始まったんです。リハビリはトレーニング自
体がつまらないものが多いんですが、そのリハビリを少しでも
楽しいものにしたとお医者さんが考えたんでしょうね。

だからフットバッグは「蹴って楽しんだらどうか」といつと
ころからリハビリで始まったんです。リハビリはトレーニング自
体がつまらないものが多いんですが、そのリハビリを少しでも
楽しいものにしたとお医者さんが考えたんでしょうね。

石田選手がフットバッグに出会ったのはどういうきっかけ
だったんですか？
僕はサッカーを小学校1年から高校3年までやっていて、大学
1年生のときにフットバッグを知ったんです。中学、高校の頃は
「サッカーでプロになりたい」という気持ちがあったんですが、
強豪校に入ると上が見えてくるんです。高校は神奈川県でベス
ト4に入る学校だったんですが、そこで自分よりも更に上がい
るということを実感して、チーム内にも上がいるし、他校のチー

ムにはもっと上手い人がいる。ということで、サッカーでプロを
目指すという気持ちがあったんだって思っています。

その後、大学でもサッカー部に入りました。そのときは「プ
ロは難しいだろうな」と思いながらもサッカーは好きだったので
とりあえず入部してみたいんですけど、入学したばかりの4月に
スポーツシヨップでフットバッグを知ったんです。スケートボード
とかよくビデオが流れたりするじゃないですか。ああいう感
じでフットバッグの海外のスター選手がプレイしている映像が流
れていて、衝撃を受けたんです。僕はもともと目標を持ってや

出来ないと思っていたものが出来るようになるという成功
体験を、自分の感触として知ることが大きいと思いま
す。

石田選手は日本で唯一のプロですが、なぜフットバッグで
プロを目指そうと思ったんですか？

2008年に就職して、約3年間働いた時点で会社を辞めて
プロになったんですが、仕事自体は嫌いではなかったんです。メ
ンバーも良かったんです。ただ、先が見えていた。例えばキャリ
アアップして本社に入ったとして、その仕事の内容が見えていた
のが僕はあまり好きじゃなくて、それとは逆に、日本ではフッ
トバッグで生活をしている人はいなかった。その先が見えな
いんです。そこに挑戦してみたかった。もしフットバッグを
やりながら、関連する仕事に就いて生活が出来るのなら、自分
の喜びとしていけばいいなと思ったので、会社を辞めました。

るのが好きなタイプだったので、マスタープレイヤーと同じレベ
ルになりたい、やってみたい」と思って部活を辞めました。

大学を卒業して一般企業に就職したんですが、その後フット
バッグは続けました。夜10時位に家に帰ってきて、ご飯を食べて
深夜11〜12時頃から練習を始めて2〜3時まで。その時の目標
は国内の全国大会だったんです。もちろん行く前は世界大会に
も出場したいという気持ちはあったんですけど、まずは日本の
大会でも1位になろうと思いました。それが2003年の8月
ですね。

プロということはフットバッグ関連で収入を得ているというこ
となんです。収入の1つはパフォーマーとしてイベントに出演
すること。あとはフットバッグを生産して販売しています。それ
までの日本には模して作ったようなフットバッグしか売ってな
かった。日本のプレイヤーは海外から買っていたんです。で
もそのフットバッグだと「難しい」と言ってみんなすく辞めちゃ
うんですよ。本物ではないのでやりづらいのは当たり前で、僕
でもちゃんとプレイ出来ないくらいなんです。だから自分で生
産を始めたんです。あとはスクールですね。フットバッグを教え
る環境。一対一もあれば、複数人でサッカースクールみたいなやつ
てる場合もあります。今は独立して7年目なんですけど、ありが
たい事にアルバイトをせずに活動ができています。

——ご自身の経験の中で、フットバッグにはどういった「スポーツの力」があると実感されていますか？

フットバッグという競技自体、すごく難しいんです。その難しさを超える精神力と集中力を培うことが出来るというのが一つ。簡単に言うと、フットバッグは一点を見つめてボールと対峙するだけなんです。だから上手くできなくてイライラしたりもします。そういったところを超える力を得ることが出来ると思いますね。出来ないと思ってたものが出来るようになるという成功体験を、自分の感触として知ることが大きいと思います。

それと僕は子供に教える機会も多いんですが、子供は夢中になっている状態なので、自然に集中力が付いてくるようになります。それにフットバッグはもとよりハビリのトレーニングとしてアメリカで生まれたものなので、当然のことながら体幹のトレーニングにもなります。あと、そういうスポーツ教室をこぼれながらいる親御さんにもすごく喜んでいただいています。僕は「親御さんもやって頂いてもいいですよ」という話をしているんですが、「じゃあ親子でやってみようかな」という人も出てきたりとかして。結局、こういうスポーツを通して親子同士で繋がりが深くなるのはすごく良いことだと思っんです。

——石田選手と同じような活動をされてる人は日本にいないんですか？

いないですね。ただ最近では、自分のスクール生が第二波で初めての人に教えるという状況は生まれてきています。女子のプレイヤーもいるんです。プレイヤーだけではなく、オフィスでフットバッグを揉んでるだけというOLの方もいます。その方がおっしゃるには、ヒーリング効果があるらしいです。

どんなアプローチであっても、どんな人であっても、フットバッグが気軽に出来る、フットバッグを知っている、という環境を作りたい。

——今後のビジョンはどのように描かれていますか？

僕が独立した時の目的というのは、世界大会とか日本の大会で優勝出来るようなプレイヤーを育てたいというわけじゃないんです。スクール生はそこが目標でいいんですけど、例えばフットバッグでお手玉をやっても全然構わない。どんなアプローチであっても、どんな人であっても、フットバッグが気軽に出来る、フットバッグを知っている、という環境を作りたいんです。高い技術の技を習得しなくても、リハビリなどで足の甲にフットバッグを置いてただ脚を上げたり下げたりするだけでもいいんです。

先ほど言ったようにフットバッグはそもそも難しい競技で、やり方やコツがわからないとなかなか続かないんです。なので逆に、公園などで遊び感覚で、このフットバッグを蹴っている人が、僕のいないところでも見れる環境を作りたいんです。フリースピーやつるような感じですね。

あと、実はフットバッグはアジアにも知られていないんですよ。ヨーロッパ・アメリカはある程度の認知度があるんですが、アジアでも新たなスポーツとして知ってもらおうような普及活動したいと思っています。どんどん発展していくと色々な人や団体が関わるようになって拡がっていくと思っんですが、そのきっかけを作りたいと思っています。



分を人間として成長させるという側面もありながら、結局は外部の人と人の繋がりが大切だし、人と人との繋がりによって成長させていっているという実感がある。結局のところ、スポーツは人間本来の成長に繋がっていると痛感しています。

それと、日本でも世界大会を開催出来るような状況を作れたらいいなと思っますね。今、世界のプレイヤーたちの間では「日本に行きたい」「日本でやりたい」と言う人も多いんですけど、まだ実現するレベルには至ってないんです。その理由の一つは、僕はいつも世界大会に出場するためにヨーロッパやアメリカに行っているんですが、日本で開催するとなると、プレイヤー全員が世界大会のために僕と同じくらいの距離を移動する必要が出てくるんです。でもみんなプロではないので、自費で行く必要があるんですね。

——石田選手にとつてのスポーツとは、単にプレイヤーとしての満足感や達成感だけではなく、自己実現という「夢」が詰まっているように感じられますが、なぜ石田選手はそれほどスポーツの力に魅了されたのでしょうか？

やはりスポーツを通して人間として成長できるからだと思うんです。僕はサッカーをやっていたので、団体競技と個人競技の両方を経験しているんです。団体競技と個人競技はどちらもそれぞれの良さがあるんですね。団体競技は、チーム内での絆。僕の場合は今も良く会うような仲間や一生を通して交流できる仲間を作ることができたんですが、スポーツを通して本当に人生が豊かになるような感触があります。

個人競技については、自分と向き合う事で鍛錬を重ねて、自

プロフットバッグプレイヤー 石田 太志

2008年に株式会社コムテガルソンに勤務したが、どうしてもフットバッグで生活していく夢を捨てられず2011年8月に退職し、プロフットバッグプレイヤーとして活動を開始。2006年にはカナダに1年間、2008年にはヨーロッパに渡り、フットバッグの技術を磨きながら海外の多くの大会に出場し入賞。フットバッグの世界大会である「World Footbag Championships」にて2014年と今年2018年に優勝しアジア人初の世界一に輝いた日本を代表するフットバッグプレイヤー。またアジア人で初めてフットバッグ界の殿堂入りも果たした。これは600万人いるプレイヤーの中で過去45年の間に79人のみ選出されている。フットバッグを使用したサッカースキルアッププログラムや他スポーツでの股関節トレーニング、高齢者の方への介護予防としてのトレーニングも各地で実施。日本サッカー協会の夢先生の資格も保有しており、全国の小中学校で夢について教えている。

